

天地

ネットワーク テーブル 502号

天地シニアネットワーク 2019.12.15

T E N T I T O D A Y			1
会員の広場			2
随 想	英会話の楽しみ (1)	伊那 闊歩	2
論 考	中国人から見た日本人の言語表現心理 (10) <自他を分ける感情表現と感覚表現>	兪 彭 年	5
自 伝	三四朗自伝「サクソ奏者という生き方」	藤本三四朗	7
随 想	160年前の日本社会に驚愕・感心・感動した欧米人 <その9>「職人の技術、センス、仕事ぶりの素晴らしさ」	臺 一郎	8
随 想	海外随想録：5 アフリカ篇・「東アフリカ」(1)	森永 善彦	10
講演会	「新三木会」「奈良興福寺文化講座」		12
事務局			12

T E N T I T O D A Y

平成31年、令和元年の二つの年号が重なる歴史的な一年も残りわずかとなりました。新天皇、新皇后の頼もしい御姿、堂々とした御振舞は、国民へ将来への希望を強く感じさせました。また、ラグビーW杯で<ONE TEAM>のもとに大善戦した日本チームの活躍、吉野博士のノーベル賞受賞は別の面で、令和の新時代を明るくしてくれました。

しかし一方、今年も各地で自然災害が多発し、秋口の関東地方を襲った大型台風は、都市部の弱さを暴露、都市化の流れに大きな警鐘となりました。いつ災害に会うか分からない不安、全国共通のようです。地球温暖化への取り組みが甘く、国際社会からつまはじきされることなど論外です。

米中交渉の行方、英国のEU離脱、トランプ大統領の弾劾などと国際面で大きな問題が続出していますが、安倍首相が出る幕は少ないようです。国内問題で内閣支持率が下がっていますが、海外でも地球温暖化への取り組みのように日本批判が強まっていますは挽回するのは難しそうです。

最近、日本の力が落ちたと言われています。事実、会話の中で、中国には完全に抜かれ、韓国にも追い付かれたという声をよく聞きます。そしてさらにこの状態をひっくり返すのは難しいと考えている人も多いようです。戦後の

成長路線の中で育ってきた世代には、停滞、低迷は馴染めないようです。

一番の心配としては、「教育」を上げる人が多いようです。現状では、家庭も学校も社会も次世代を担う＜後継者＞造りに失敗したようです。「伝統を知り、将来を見据えて行動する」若者は少なく、日本を知らない日本人が増える傾向にあるようです。一朝一夕には変えられず、急がば回れで行くべきでしょう。

天地シニアネットワークも、臺一郎さんのように元気で、熱心な方が現れ、息を少し吹きかえました。

今年一年のご支援、ご協力有難うございました。来年もよろしくお願ひします。皆さん、よい年をお迎えください。

会員の広場

英会話の楽しみ（1）

伊那 闊歩

1. はじめに

ちかごろテレビには、米国大統領をはじめ多くの外国要人たちが頻繁に現れ、外国語での談話が放映されることが多くなった。話の内容は日本語に翻訳されてテロップで流されるが、その音声をそっくりそのまま聴き取ればさらに理解が深まるであろう。そこで話される言語は、詳しく検証するまでもなく、圧倒的に英語が多い。英語を話す人たちは、世界中で15億人を超え中国語人口13.7億人より多いのだ(*1)。しかも、インターネット上の英語人口は10.5億人、ビジネス、サイエンス、スポーツなど殆どあらゆる分野で英語が共通語となっている。この勢いは、今後ますます顕著になるであろうことが予想される。

話される英語を的確に聴きとり、さらに英語であるていど自由に話ができるようになりたいとかねがね思っていた。中学校に入学して英語をならいはじめ、高校、大学での英語の授業をあわせれば、10年間も英語を習ったことになる。その後、筆者は大学に残りサイエンス（主に物理学）に関する英文（時々独文）の論文を絶えず読みつづけ、自らも英文で研究論文などもいくつか書いた。米国の大学にも留学し現地での生の英語にも接してきたのだ。さぞや、英語の達人になったにちがいないと考えられても当然だ。

ところがである！なんと、未だに英語が明確に聞こえてこないのだ。次の文章は、小田急線の急行車内で流された車内放送の文章である：

The next station is Seijo-gakuen(成城学園).The doors on the left side will open. The stop after Seijo-gakuen will be Noborito(登戸).

この放送を毎日通勤途中で、耳に胼胝ができるほど繰り返し聞かされていれば、自然に覚えてしまうであろう。筆者もそうであるといいたいところであ

るが、この 2 行目の **The stop after** がいまだにはっきり聞こえてこないのだ(*2)。

喋るほうはさらに覚束ない。山のように恥をかき続けた。お蔭でいまや少々恥をかくことには抵抗がない。かれこれ 70 年もの間、英語に関わってきたにもかかわらず、この始末だ。性格がよっぽど英語に向いていないのか、記憶障害に気づいていないのか、あるいは、根っからのアホではないかと思われる。最近では聴力の衰えも加わって、テレビでの日本語の会話でさえよく聞き取れないことが頻発してきた。さらに、日本語の会話においても、返答に時間がかかることが多くなった。まして、英語で返答することにおいては、推して知るべしである。舌がもつれることもしばしばである。さらにさらに、視力の衰えもあって、英文を声にだしてそれなりのスピードで読むことができなくなっている。情けないことに、いつまでたっても英語の初心者なのだ。

1969 年 7 月 21 日、月面に到達した宇宙船アポロ 11 号の船長ニール・オールドレン・アームストロング (1930-2012) が、月面に人類史上はじめての 1 歩を印す際に発した言葉：

That's one small step for man, one giant leap for mankind.

これは(ひとりの)人間にとってはちいさな 1 歩だが、人類にとってはおおきな飛躍である

この有名な言葉を筆者は聴き取ることができなかった。このままでは、どうあっても不甲斐なさすぎる。同時代に生きる者としてこれほど悔しいことはない。

英語が聴けない、話せないというトラウマを抱えて、悶々としながらもボーッと生きているうちに、元大学の同僚、物理学者の I 氏からお声がかかった。「もしよかったら、英会話教室に来てみませんか」。なぜ、I 氏が呼び掛けてくれたのかよくわからないが、筆者はこれを天の声と受け取り、いちもにもなく入会させてもらったのだ。それは広島市にあって、核廃絶、反戦、平和運動を続けて活動している NPO 法人が経営する英会話教室なのだ。

クラスの定員は 8 名、現在カズオ・イシグロの小説「**An Artist of the Floating World(浮世の画家)**」(*3)を 1 節ずつ輪読し、米国人キャシー先生の指導を受けながらその感想をそれぞれ述べ合うのだ。参加者の中にはすでに通訳としてお呼びがかかるほどの達者な人たちもいて、筆者のような初心者にとってはかなりハードルが高い。いきなり高レベルの読書サークルに参加して、入会した 2019 年 3 月ごろは、果たしてついていけるものか、居心地はよくなかった。それでも乾坤一擲(?)の思いを携えてもがきながら頑張っていくうちに、いろいろなことがわかってきた。いままですべて間違っていたとは言えないまでも、何がおかしかったのかが臆気ながらわかってきた。と同時に、会話のコツのようなものが見え始めた。この歳になっても進歩するという実感が得られたのだ。

そこでまずは、英会話を学ぶ生活環境を整えようと思った。今や、多くの便利な電子機器が街にあふれているので、それらを利用することはたいへん

有効である。

DVD に収められた映画をテレビ画面で見ることができる。これでたとえば「ローマの休日」「マイフェアレディ」など好きな映画を観て、英語を繰り返し聴くことができる。また CD プレイヤーを使えば、たとえばアンヌ・モロウ・リンドバーク「海からの贈り物 (Gift from the sea)」(*4)のしっとり落ち着いた朗読を聴くことができる。

電子書籍なるものをキンドルが発売していて、これによって筆者は、TED-Talks(*5)を聴いている。TED-Talks は、世界中から選ばれた現代の賢人たちの、社会学から天文学にいたるあらゆる分野の話題についての講演を集めて紹介しており、たいへん面白く役にたつ。

英会話にかんする書籍については、おいおい詳しくご紹介したいが、とりあえず筆者の使用している辞書は、小学館「大人のための英語学習辞典」(*6)、旺文社「英和中辞典」、「Oxford Advanced Learner's Dictionary」(*7)

「Collins Compact Thesaurus」(*8)それから電子辞書(*9)がふたつある。文法書としては、旺文社「表現のための実践ロイヤル英文法」そして Michael Swan「Practical English Usage」(Oxford)(*10)などである。以上、英文学者ならさぞやと思える立派な辞書類が並んだが、何度も強調するように(強調してどうなることでもないが)、筆者は会話については情けないことに初心者である、これらの辞書を縦横につかいこなせることにはほど遠いのだ。

では、なぜ英語の専門家でもない筆者が英会話について書くつもりになったのかというと、80歳を超えた初心者の年寄りが、どこまで進歩することができるか、また従来の英語の勉強法の何が間違いであったか、ひとつの実験(体験)報告を書けば、何らかの役にたつかもしいないかと思っただけである。

筆者の強みは、英語に限らず、外国語そのものにたいへん興味があるということかもしれない。ドイツ語は物理学の歴史的文献をよむために是非とも必要であった。フランス語については、ポール・ベルレーヌの詩「秋の歌」(*11)をたまたまフランス人に読んでもらって、その美しい韻律に魅了された。フランス語もドイツ語も読んで理解することはできるが、喋ることはまったく出来ない。外国語の学習は外国の文化にふれることであり、心を豊かにしてくれる。そして、新しい自分に出会えるという(*12)。筆者もそれをあていど実感してきた。

次回から、文面に英文が頻繁に現れるが、英文にかんしては国際キリスト教大学(ICU)出身で、高校教師として長年若者を指導してこられた U 先生にアドバイスをお願いした。英文の記述には細心の注意を払うことは当然であるが、ミスがあったとしても、それは、決して U 先生の所為ではなく、筆者の思い違いや早とちりであることをお断りしておきたい。

注)

(*1) 人口の多いものから順に、中国語人口 13.7 億人、英語人口 5.3 億人、ヒンディー語人口 4.2 億人、スペイン語人口 4.2 億人、アラビア語人口 2.3 億人となっている。以上はネイティブの人口であるが、ネイティブではないが日常的に英語を使い、流暢に話す人たちをあわせれば、その人口は 15 億人に達するという。日本語人口は約 1.3 億人で世界第 9 位

だそうである。

- (*2) このあたり、U先生にご教示いただいたのだが、車内放送にはU先生でもたいへん聴き取りにくいものがあるとのことだ。
- (*3) この小説は映画化され、NHKの特別テレビ番組としても放映された。
- (*4) CDは、Random House Audio Listening Libraryに収められていて書店で入手できる。
- (*5) TEDはニューヨークに本部をおくLLC(有限責任会社)。この会社名は、Technology, Entertainment, Designそれぞれの頭文字をとってTEDとしていて、そこでの講演を誰でも無料で視聴できる。
- (*6) NHKの「朝いち」で紹介された。基本的な英単語を詳しく解説している。
- (*7) 数ある英英辞典中の定番。適切な例文が豊富である。
- (*8) 類語辞典の定番。
- (*9) 英単語の意味をすばやく調べることができる。例文や熟語などの検索には不便である。
- (*10) 例文が多く、読み物としても、つい読みふけてしまうほど面白い。
- (*11) 「フランス名詩選」(岩波文庫)
- (*12) ガブリエル・ワイナー「脳が認める外国語勉強法」(ダイヤモンド社)たいへん示唆に富んだ、面白く有用な本である。

中国人から見た

日本人の言語表現心理 (10)

俞彭年

自他を分ける感情表現と感覚表現

「ああ、怖い。」「ああ、怖がっている。」、前者は話者の自分の感情を表現し、後者は話者が他人の感情の表れを表現している。

「ああ、熱い。」「ああ、暑がっている。」、同じく前者は話者の自分の感覚を表現し、後者は話者が他人の感覚の表れを表現している。

感情表現と感覚表現において日本語は自他をはっきりとわける。自分の感情と感覚は当然知りえるから、形容詞と形容動詞でそのまま表現できる。

ところが他人の感情と感覚になると、感情と感覚は心の中の動きで内面的であるため、直接に知り得ることができない。従って、他人の感情と感覚は形容詞と形容動詞で直接に表現できないことになる。

そこで、日本語はいろいろと工夫をして、内面的な感情と感覚が外面に表れ出した状態でもって他人の感情と感覚を表現したり、他人が自分の感情や感覚を自分で話したりするなど、様々な表現形式をとる。つまり、日本語では他人の感情と感覚は直接には表現することができない。

日本人がこのように感情と感覚の表現において自他を分けるのは論理的とも言える。話者が自分の場合は形容詞と形容動詞で直接に表現し、他人の場合はよく動詞を用いたり、形容詞と形容動詞の語幹に「がる」か助動詞「そうだ」を付けたりして、外面に表れ出した客観的な状態として表現する。

しかし、中国語はこのような区別はしない。自分のも他人のも、みな感情と感覚として直接に表現してしまう。この点、日本語はきめが細かく、中国

語はきめが粗い。この違いが言語学習や通訳や翻訳などに難しさをもたらしている。日本語を中国語に訳すときには、この違いを普通無視されてしまうが、その逆、中国語を日本語に訳すときにはこの違いに十分配慮しなければならない。

たとえば「**我見至你很高兴。**」は「お会いできてたいへんうれしいです。」となり、「**他见至你很高兴。**」は「お会いできて彼はとても喜んでいます。」となる。「喜ぶ」は嬉しいと思う気持ちが外面に表れてた状態を示す動詞だ。中国語ではみな「**高興**」であるが、日本語になると「嬉しいです」と「喜んでいます」の二つに分けられる。

「**我胸口难受。**」は「(わたしは)胸が苦しいだが、「**他胸口难受**」は「彼は胸が苦しいと言っています。」か「彼は胸が苦しそうです。」となる。中国語では自分の感覚も他人の感覚もみな「**难受**」で表現できるが、日本語になると、自分の場合は『苦しい』となり、他人の場合は「苦しいと言っている」となったり「苦しそうだ」となったりして決まらない。

決まらないのはその状態のとらえかたがいろいろだからだ。とらえかたによって表現が違ってくる。したがって、中国人にとって難しいのはここであり、その状態をきめ細かく分析しなければならず、中国語のようにおおざっぱではいけない。動詞を使うと、「がる」を付けるのと、「そうだ」を付けるのと、「○○○は…と言っている」のとは、みなそれぞれ違うということをはっきりさせるべきだ。

相手の感情と感覚がどうかを聞くことは当然あることであり、この場合は自他の区別がなくなるのは当然で、論理にもかなうことだ。たとえば、「きょうは楽しかったですか。」「歯はまだ痛いですか。」「この臭いがいやですか。」など、形容詞と形容動詞で直接聞いている。

中国語も同じで、これらを訳すと「**(你)今天开心吗?**」「**(你)牙齿还痛吗?**」「**(你)讨厌这种气味吗?**」となる。しかし、これは二人称に限ったことであり、第三者の感情や感覚を聞く場合中国語は自他を分けないが、日本語は分けなければならない。二人称の人は第三者でないから第三者の感情や感覚を知ることができないため、二人称の人には外面に表れてた状態しか聞くことができないことになる。これも論理的で、納得がゆくものだ。

たとえば、「**今天他感到孤单吗?**」は日本語では「彼はきょう寂しがりましたか。」となり、「**他要了苹果吗?**」は「彼はリンゴをほしがりましたか。」となる。

希望・願望も内面的なものであるため、日本語は感情表現と感覚表現と同じように自他を分けて表現しなければならない。中国語はやはり分ける必要はない。たとえば、「家に帰りたい。」「彼は家に帰りたがっている。」は中国語に訳すと、「**我想回家。**」「**他想回家。**」となる。日本語は自分の希望・願望であれば、直接に願望の助動詞「たい」を使って表現し、他人のであれば「たい」の語幹に接尾詞「がる」を付けて「たがる」にして表現する。

もし、相手は何の希望・願望であるかを聞く場合は自他の区別はなくなり、「たい」で直接聞くことができる。たとえば、「早く家に帰りたいですか。」「アルバイトをしたいですか。」は中国語にすると、「**你想早回家吗?**」「**你想打工吗?**」となる。中国語はみな「**想**」で自他の区別なく表現している。

日本語では感情と感覚を表す形容詞および形容動詞で、意味の上で対応する動詞があるのとないのがある。たとえば、「苦しい」と「苦しむ」、「怪しい」と「怪しむ」、「楽しい」と「楽しむ」、「痛い」と「痛む」、「惜しい」と「惜しむ」、「恐ろしい」と「恐れる」、「哀れ」と「哀れむ」などなどだが、これも中国人にとってはやっかいで、難しく思うところだ。

三四朗自伝『サクソ奏者という生き方』(1)

藤本三四朗

ジャズやボサノバのサクソ奏者をしています。生まれは1959年(昭和34年)の亥年。両親は熊本出身ですが、僕が生まれた時は東京勤務でした。父は銀行に勤務するサラリーマン、母は普通の主婦でした。ただし、母は幼い頃からピアノを習い結婚当時は結構な腕前だったようです。自宅で近所の子供達にピアノを教えながら、毎日バッハやドビュッシー、ショパンを練習していました。

繰り返し練習する母親のピアノの音は僕の脳みその奥まで染み込んでいます。今でも、どんな有名な人の演奏でも、母親の弾いていた音楽に勝るものを聞いたことがありません。それはそれで、困ったものですが・・・

とにかく、僕は5歳から9歳までバイオリンを習い、こっそり隙をみては鍵盤を叩いていました。母に習わなかったわけでは無いのですが、言うことは聞かなかったという感じです。

さて、父親が熊本に転勤になったのは、僕が9歳の時です。転校した学校の校庭の広さにびっくりして、また、給食の美味しさに感動しました。そこに広がる、青いどこまでも透き通る空を見て、音楽のことはすっかり忘れ、ぼくは東京のオタク系から、野山を駆け回って遊ぶただのガキになりました。

湧き水の冷たい川で泳いだり、天草の海で日が沈むまでずっと海岸で貝を掘ったり、草千里の風に吹かれて阿蘇の煙を眺めたり、あるいは乱暴な独楽回しで、相手の独楽を叩き割ったり、小学生同士の殴り合いに参加したり、本物の子供を体験させて貰えました。

そんな田舎生活もわずかの期間で、転勤は続き、岡山、そして東京へと戻ってきました。運動神経が発達したおかげで、中学では2年で入ったバスケット部で、都大会優勝しました。

暇な時は友達と一緒にギターを弾いて遊んでいました。田舎の遊びのエネルギーのやり場がなくなった僕はいたずらに走りました。オリジナルの曲を作って、給食時間に放送室をハイジャックして勝手に自分の曲を流したり、掃除と称して、トイレに水を貯めてプールにしたり、黒色火薬を作って爆発させたり、しまいには黒板に・・・で、ついに担任が怒り狂って僕が血を吐くまで殴るという事件が起こったりしました。

さすがに問題が表面化して、すこしおとなしくなりましたが、その後はバンド活動にエネルギーを注ぎ、実はレコードを作るといふ暴挙に出ました。ライブハウスにオーディションに行き、中学生はさすがにダメと断られ、そ

の頃から、イギリスへ行くぞ、という意味不明の決心が生まれてきました。好きなバンドがみんなイギリス出身だったのです。

中学卒業後は国立市にある私立の進学校桐朋学園の高校に入学しました。その時の僕の偏差値は70以上ありましたから、どこでも受けられたし慶応にも推薦されていたのですが、なんとなく音楽の香りがしたのかもしれない、桐朋学園に行くことになりました。

桐朋で僕は校風にある自由の香りを感じると同時に、世の中の格差の影に不信感を覚えるようになりました。思春期という時期に情報不足だったのか、行き場を失った僕は、ロック喫茶、ジャズ喫茶に入り浸り、音楽の仲間を増やします。勉強の意味が完全にわからなくなった僕は、ある日、答案用紙の裏にピンクフロイドの歌詞を書いて提出し、勉強と決別しました。

How I wish, how I wish you were here.
We're just two lost souls
Swimming in a fish bowl,
Year after year,
Running over the same old ground.
And what have we found?
The same old fears.
Wish you were here.

そしてもう、音楽以外信じられる道は無い、と確信します。そこからアメリカのバークリー音楽院に行くことになるまでは、また一悶着あるのですが、ひとまず筆を置きます。

僕の活動スケジュールサイトです↓

<http://sax346.com/schedule.html>

160年前の日本社会に驚愕・感心・感動した欧米人（9）

臺 一郎

職人の技術、センス、仕事ぶりの素晴らしさ

1853年、1854年と二度にわたり日本を訪れた米国の東インド艦隊司令官マシュー・ペリーは、帰国後に出版した遠征記の中で、日本人の手作業の技術や技能の素晴らしさについて次のように記述した。「実用的、機械的な技術において日本人は非常な巧緻を示す。彼等の手作業や技術の習熟度は実に素晴らしく、日本の手工業者は世界のいかなる手工業者にも劣らないほど練達である。よって国民の発明力が自由に発揮されるようになったならば、世界で最も進んだ工業国に追いつく日も、そう遠くはないであろう」と。

駐英公使のオールコックも、その著書『大君の都』の中で日本の職人の腕やセンスや精神を絶賛した。すなわち「すべての職人的技術において、日本人は問題なしに非常に優秀なレベルに達している。磁器、青銅製品、絹織物、

漆器、冶金一般の意匠と仕上げの点で、また精巧な技術を要する製品に関して、ヨーロッパの最高級製品に匹敵するのみならず、それぞれの分野において我々が模倣したり、肩を並べることができないほどの品物を製造することができる」と紹介した。

「ひょっとすると日本の職人の方が西欧の職人より優秀かもしれない。西欧の優れた道具の使い方をすぐに覚え、機械類に関する知識も簡単に手に入れて、手順を教えるとその単なる真似事では満足せず、自力でどんどんその先へ先へとの仕事をやってのける。日本人は既に何人も職人が機械工場で立派な仕事をしている」とフランスの指導と支援により造られた横須賀造船所の職人の仕事ぶりに感嘆・感心したのは、幕末にフランス公使館の駐在武官としてやってきたエドゥワルド・スエンソンであった。

また 1859 年にロシアのムラヴィヨフ艦隊の乗組員として江戸入りしたテイリーは、宿舎となる寺の改修にやってきた大工の仕事ぶりを見て驚愕した。彼は証言する。「二十人ばかりの半裸の大工が庭で忙しく働いていた。板を引き割り、それをまるで手品のように椅子やテーブルなどのヨーロッパの備品に変えていく。彼らの前には単にお手本の品が置かれているだけだ。疑いもなく、彼等は世界で最も熟練した指物師であり大工である」と。

1863 年にスイスから修好条約締結のために来日した外交使節団の団長にしてスイス時計工業組合会の会長で、後に同国の大統領にまでなったエメ・アンベールは、江戸の商店街の店頭で陳列されていた工芸品を見て、その出来のよさや趣味の良さに驚き、著書『絵で見る幕末日本』の中で、「江戸の職人こそは真の芸術家である」と絶賛した。

英国の女性旅行家イザベラ・バードも、著書『日本紀行』の中で、京都を訪問したときに訪れた工房について、「きょう日本政府が助成している工房の一つで、高さ 1 フィートほどの花瓶一対を見ました。これは奈良の正倉院にあるものの複製で、まさに完璧なものでした。仕事の手を抜いて悪趣味なオリジナル作品を作ったり、本物の美術品の下手なまがいものを作ったりしているイギリスの職人は、京都の実直で入念で愛情のこもった労働者が、一日 1 シリングでどんなものを完璧に仕上げるかを見るべきです」と絶賛した。

また 1884 年（明治 16 年）に来日し、華族女学校（のちの女子学習院）の英語教師を一年間務め、後年再来日してお茶の水女子大や津田塾大学の英語教師を務めた米国のアリス・ベーコンは、その著書の中で「日本の職人は本能的に美意識を強く持っているので、金銭的に儲かろうと儲かるまいとそういうことに関係なく、彼らの手から作り出されるものは皆美しいのです」と称賛した。

こうしてみると、日本人のものづくりに関する優れた技能やセンスは、随分昔から何世代にもわたって受け継がれてきたものなのだろう。と、ここまで書いて、そう言えば筆者が学生の頃の日本人は、国際技能オリンピックで良く金メダルを獲得して新聞紙上を賑わしたなど思い出した。あれは最近ど

うなったのだろう。

調べてみた。確かに 1960 年代や 1970 年代前半の日本は金メダルの獲得数で良く世界第一位になった。しかし 1980 年代から最近まで、その座は韓国の指定席となり、さらに最近では中国がまれにその座を占めるようになった。欧州では今も昔もスイスが 2 位や 3 位など上位の座を良く占める。ちなみに最近の日本は世界 3 位から 10 位の間をうろうろしている。

先進国や経済大国になると、当然のことながら産業構造が変わる。結果、産業界の現場でも手先の器用さなどに象徴される技能優秀者の需要が減っていくのかもしれない。また若年人口の減少やら、若者の理数系離れ、或いはメーカー離れなども影響しているのかもしれない。

アフリカ編 東アフリカ（1）

私の海外での体験の話しを続けます。入社後 2 回目の海外出張はアフリカでした。結婚して 2 年目 28 才でした。1974 年 10 月約 1 か月間でアフリカ大陸を東アフリカから南に下り西アフリカに北上し、計 6 か国回る予定でした。当時は羽田から英国航空の便が南周りで出ていて、ナイロビまでの直行便がありました。実際の訪問国数はケニアまで同行してくれたアフリカ部の課長の勧めで、予定になかったウガンダ、タンザニアをナイロビを起点に追加訪問したので計 8 か国回りました。

最初に訪問した都市はケニアのナイロビでした。初めてのアフリカで少々緊張しましたが、ナイロビはその頃は治安も良く、街の佇まいも落ち着いていて特筆すべき事も起こらず順調に予定をこなしました。面白い経験をしたのはウガンダとザンビアでした。

1) 先ずウガンダの話しをします。

ウガンダは日本人には余り馴染みのない国なので、ウガンダの国勢について簡単に紹介します。

ウガンダはケニアの西隣の国で赤道直下であり、1962 年にイギリスから独立しました。白ナイル川の源流となっているビクトリア湖（世界 3 位の大きさ、面積 68,000 平方 km）の約半分が国の南側に位置しています。残り半分はケニア、タンザニアに跨っています。国の面積は 23 万 6 千平方 km、人口は 3 5 百万人、農業国で主要産品はコーヒーとバナナです。

さてウガンダにはナイロビから首都カンパラ（人口約 1 6 0 万人）の空の玄関であるエンテベ空港に着きました。その頃のウガンダは政治情勢が非常に不安定でした。ウガンダを出張で訪れる日本人もほとんどいなかったと思います。他国からの便も少なく空港には 2 - 3 機の飛行機しか無く、閑散としていました。

元々インド人（アジア人）が政治、経済の実権を握っていたのですが、アミンと言う軍人がクーデターを起こし政権を奪取し、多くのアジア人を国外追放にしました。経済を支えていたアジア人達がいなくなったので経済が破綻し、物資が極端に不足していました。

街のレストランは食材を入手出来ないので休業状態、ホテルのレストランでも出される料理は豆と野菜が中心と言う状態でした。

その頃ウガンダでトヨタのディストリビューターを運営していたのがウガンダ人で、首都カンパラの市長でした。

カンパラに着いたその晩、同行してくれた課長、豊田通商のナイロビ駐在員と私の3人が市長の自宅に招待されました。ホテルに荷物をおいて、カンパラ市長の家を訪れましたが、日が暮れた後だったので庭とか周りの様子は良く見えませんでした。家は大きな庭のある豪邸でした。暫く居間で挨拶や簡単な会話をした後家の中を案内してもらいました。そして何故かキッチン案内してもらいました。

キッチンの中には大勢のウガンダ人の女性がいて皆忙しそうに働いていました。ある女性は床に座って鶏の羽根を筆っていました。また調理台で野菜を切ったり、鍋で何かを煮ていたりしました。そして我々3人は邸の外にある10メートル以上ある長いテラスの一番端にテラスに向かって並んで座らされ、我々の前に大勢の人がテラスの両側に列を作って座り始めました。

我々招待客は椅子に座りましたが、他の人はテラスに直に座っていました。始めにワインが出たりして暫くすると、我々の前のテーブルに料理が次々と出て来ました。何故かテーブルは客の我々の前にしかありません。我々の横に医者だと言う白いガウンのような服を着て、頭につばのない丸い白い帽子をかぶった50-60才絡みの小柄なウガンダ人が座って、英語で色々と話し掛けて来ました。彼は医者でどうも英語の話せる知識人の代表として通訳を兼ねていたようでした。

奇妙なのは料理や飲み物は我々だけに提供され、テラスに座っている人達には何も出ていませんでした。通訳の医者が色々と質問をしてくるので答えると、彼はそれを大声でテラスの人達にウガンダ語で伝えます。例えば料理はどうかと言うので代表のアフリカ部の課長が「大変おいしい」と言うと、彼はテラスに座っている人達に「客人は料理が美味しいと言っているぞ！」と大声でウガンダ語で伝えます。するとテラスの人達は一斉に“オー”とどよめきます。この様な事が何回か繰り返されました。

実際には鶏肉も野菜も殆ど調味料は使われていなかったようで、単に水で煮ただけのような味でした。従って食材の生の味しかせず、残念ながら食欲は湧きませんでした。しかし物のない当時のウガンダではこれは大変なごちそうだった様です。

何故食事前にキッチンの見学をしたかと言うと、物のない中でこの様に豪勢な料理を用意し最大のもてなしをしているという事を見せたかったようです。

この夕食の翌日ナイロビに戻りました。

たった1泊2日の滞在だったので街の様子とか他の事は良く覚えていません

が、街の中は活気が乏しく貧し気な様子でした。

以上がウガンダ・カンパラでのお話しです。

次回はケニアの次に訪問したザンビアのサバンナでの長距離ドライブの話をします。

文化講座・講演会

第114回 新三木会 講演会のご案内

1. 日時：令和2年・1月16日（木）13時～15時
於：如水会館・2F スターホール
2. 演題：『中央銀行で39年間働いて感じたこと』
3. 講師：白川方明氏
日本銀行元総裁 青山学院大学国際政治経済学部特別招聘教授
4. 申込：Eメール・shinsanmokukai@gmail.com 電話・070-6994-0137
フルネーム・卒年・所属（紹介者）
（紹介者）天地シニアネットワークで申し込んでください
5. 会費（受付にて）2千円、婦人千円、学生無料、
6. ホームページ <http://jfn.josuikai.net/ircle/shinsanmokukai/>

奈良興寺文化講座 令和2年1月16日（木曜日）

午後5時半～6時半：第一講

『維摩経』入門 興福寺 貫首 森谷英俊

午後6時40分～7時・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」 興福寺寺務老院 多川俊映

会場：（学）文化学園 文化服装学院内

受講料：500円 先着200名

（JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線新宿駅3分）

事務局

<投稿>を歓迎します。

<プリント版・郵送>

メール版を編集してプリント版を月に1回発行し郵送しています。

お申込み頂ければお送りします。一応、実費として月@350円（4200円/年）をいただいておりますが、強制するものではありません。

<振込先>三井住友銀行「神田支店」（普通）7871532

(口座名) テンチシニアネットワーク

天地シニアネットワーク・テーブル・502号

発行：2019年12月15日

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

〒116-0001 荒川区町屋3-2-1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス：tentisenior06@gmail.com

電話・FAX・03-3819-7651